

に『どうぞのいす』の動物たちのようにあたたかい気持ちでね」と結びます。

この訪問の2週間ほど前に、私も非常勤講師として出かけている大学の「保育内容（言葉）」の授業で「どうぞのいす」を扱いました。ですから、読み聞かせて味わってもらった温かい感想の残る絵本だと思っていました。なるほどこのようにすれば、『どうぞのいす』での交流で子どもたちが心で感じたことを、本の選択と紹介に活かすことができます。動物たちの持ち寄った食べ物がどんどん入れ替わっていくという展開を、お勧めの本を入れ替えていく動きに移し替える仕掛けと遊び心が魅力的な実践です。そこには自分では探せなかった本を知る喜びがあります。自分たちが喜びを味わうことのできた本や文章の内部の仕掛けを、このように使うことができますれば、子どもたちの本や文章に



「どうぞのいす」コーナー

向かう気持ちはずいぶん違うものになると思います。

自立した読み手を育てる原動力
— 倉敷市推薦図書冊子の活用・読書通帳のアイデア —

子どもたちが読み終えた後には、その本を永田先生の所に持ってきて、倉敷市推薦図書冊子の読み終えた本の所に先生からシールを貼ってもらいます。この推薦図書冊子の活用も、旭丘小学校の読書教育実践の大きな特徴です。子どもたちに自由に本を選んでひたすら読んでほしいというのは、多くの先生方の願いです。しかし、それは一朝一夕にかなう願いではありません。なぜ推薦図書冊子づくりを行ったのか。藤田校長先生に伺うと、「授業中に、なかなか本を選べない」「図書館の多くの本のなかから限られた時間で、自分に合った本を選ぶことがとても難しい」という子どもの読書の最も切実な課題に取り組むために、推薦図書冊子を子どもたちに配布したり、読書量を子どもが自覚して、たくさん本を読めるよう読み終えた本を記録する読書通帳を活用したりしていったことでした。

平成25年7月に、倉敷市の司書教諭・教諭・学校図書館司書を中心とする30名程の推薦図書選定ワーキンググループを倉敷市が立ち上げ、何度も協議を重ね推薦図書が選定され

ました。「読書目標」の設定や読書通帳のアイデアが生まれ、平成26年4月から推薦図書冊子を使った実践が始まりました。

実際に永田先生と山本先生の授業のなかで推薦図書冊子と読書通帳の取り組みを拝見しました。推薦図書冊子には、小学校1年生から6年生まで、子どもが興味をもちながら読む力を高めていくための図書をしっかりと選ばれています。子どもたちにとっては（特に何を讀んでいいか迷う子どもたちにとっては）、読書を進めていくためのチャート（海図）のようなものです。それがあるとないのでは、子どもたちの選書に向かう姿勢は違ってきます。



永田先生から推薦図書冊子にシールを貼ってもらう児童

第56回「博報賞」受賞

（国語教育領域）

岡山県 倉敷市立旭丘小学校

「読む文化」を築き、
読み続ける人を育てる学校

山元隆春 広島大学 名誉教授



本を借りて山本先生の待つかウンターに並ぶ児童たち

学校に図書館司書が配置されているため、多くの学校で時間割に国語として「図書の時間」が組み込まれていることでした。この「図書の時間」では必ず本を2冊借りるのことに決まっています。時間割に組み込まれているので児童が必ず学校図書館に足を運ぶことになりました。図書館の本への「アクセス」が保障されています。

「図書の時間」は司書の山本先生の「1年生の時に私が『どうぞのいす』（香山美子作・柿本幸造絵、ひさかたチャイルド）の読み聞かせをしたのを覚えていますか？」という言葉から始まりました。多くの児童が「はい、覚えてる」と反応します。「どうぞのいす」は、最初に登場する（表紙にも描かれている）うさぎがつくった「どうぞのいす」に動物たちが次々と寄ってきて、次の動物のために、どんぐりとか蜂蜜とかいろいろな食べ物を置いていく絵本です。図書館の前の方に、一脚の椅子が置いてあつて、山本先生は「今年はその本バージョンを、つくってみました」と言いながら椅子の方を指さして、「これは、他の学年の人が選んで置いてくれた一冊の本です。この『どうぞのいす』に置いてある本を借りる人は、自分が次の人にお勧めしたいなと思う本を置いて、ここにある本と交換して、本を借りてください。借りたい人はその本を借りて、その後、隣に置いてある本を椅子に置いてください」と話し、最後

令和8年6月8日。その名の通り、東に向かえば朝の光が差す小高い丘の上に、倉敷市立旭丘小学校（全校児童数370名）はありました。約束の時間にタクシーで駆けつけると、すがすがしい朝の光のなかで、藤田校長先生・井口教頭先生はじめ、学校のスタッフの皆さんが笑顔で迎えてくださいました。

子どもが読むことに夢中になる働きかけ「どうぞのいす」本バージョン

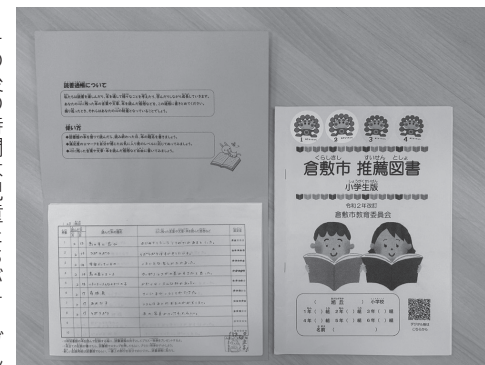
2年い組の33名の児童が図書館に集まっています。担任の永田久美子先生と司書の山本優衣奈先生が担当する「図書の時間」の授業です。藤田校長先生に伺うと、倉敷市では、すべての

学校に「読む文化」を築き、それを継続させることが、読み続ける子どもを育てる。

訪問前にお届けしていた「貴校での取り組みの中心を、仮に一語で表すとすればどのような語をお選びになるでしょうか。その「この理由」も含めて伺うことができれば幸いです。」という質問に、藤田校長先生は「耕」という漢字一文字を挙げ、その「理由（この「を」「耕す」は、田畑を時間をかけて丁寧に育てることである。読書教育も同じように、すぐに成果が見えるものではなく、子どもの心を耕す、言葉を耕す、思考を耕す、学校文化を耕す、地域や家庭とのつながりを耕すという積み重ねによって、少しずつ豊かな土壌をつくっていく」と答えてくださいました。

「豊かな土壌」といえば、旭丘小学校では、月に2回程度、先生方の中で講師の順番を決め、自分の得意分野で講義をするOJT「あさ力フエ（旭丘力フエ）」を実行しておられるとのことでした。「あさ力フエ」とは放課後に

その後の時間は児童たちがテーブルで自分の選んだ本をひたすら読む黙読の時間です。小学校2年生がひたすら読みふける様子を目の当たりにして、驚きの思いを抑えることができませんでした。何しろ1学期の半ばです。応募資料からも充実した読書教育が展開されていることは分かったつもりでしたが、誰一人集中を切らずに、しかも自分の選んだ本を一人ひとりが自分のペースで黙読している姿に直に触れ、予測をはるかに超えた実践がなされていることを知りました。読みなさいというプレッシャーがあるわけはありません。子ども



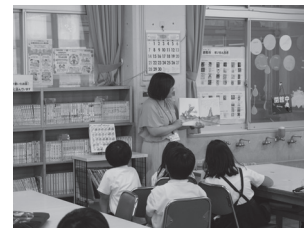
左から読書通帳と倉敷市推薦図書冊子

もたちが読まなければならないという義務感に駆られているわけでもありません。楽しくひたすら自分の興味の赴くままに本と関わっている子どもたちの姿が目の前にありました。

読む文化を築く推進力

読み聞かせは黙読のパートナー

「図書の時間」の終わりに、司書の山本先生が、「アンパンマンをつくったやなせたかしさんの絵本を読みます」と言っていて、「キラキラ」(やなせたかし作・絵・フレール館)の読み聞かせをしました。一人ひとりに届く聞きやすい落ち着いた声なので、2年生が皆集中して耳を傾けています。担任の永田先生が「感想を言える人？」と尋ねます。読み聞かせに傾注していた子どもたちからいくつもの感想が生まれました。ある児童が「キラキラはキラキラで、人間を怖がっていた。どっちも怖があるんだなあ」と発言すると永田先生は「虫が教室に入ってきたら、みんなきやあ虫だ怖いと言うけど、虫もみんなのこと



山本先生による「キラキラ」読み聞かせ場面

を怖がっているかもしれないよ、人間だって怖い」と返します。また、別の児童が「お互い怖い」と思っているところが面白かったです」と言うのと、「怖い」と思っている時に、攻撃するかどうかですね」と永田先生が得意即妙に反応します。山本先生の読み聞かせを仲立ちにして「キラキラ」という本を先生と児童が対話を通して、この場でないといつとれない「作品」にしています。

このようにして、「図書の時間」が読み聞かせと本についての対話で閉じられます。黙読でひたすら読む体験をした後に、読み聞かせによって物語を体験するという共有の時間が設けられているのが大切なことです。「読み聞かせ」が「黙読の時間」の大切なパートナーなのだという思いを強くしました。

ふと目をやると、「図書の時間」が行われた図書館の窓には何枚もの紙が貼ってありました。近づいて確かめると、それは自分が読んだ本を友だちに勧める「図書紹介文」です。読んだ本のお勧めの



「窓」の図書紹介文

ポイントが丁寧に書かれています。「図書紹介文」を好きな時に読んで、その場で本を探し出して、借りることができます。何しろ貼り出されている場所が図書館の窓ですから、紹介されている本をすぐに探し出すことができます。図書館の窓が次の読書への素晴らしい「窓」になっているのです。

学校に「読む文化」を築き、それを継続させることが、読み続ける子どもを育てる

訪問前にお届けしていた「貴校での取り組みの中心を、仮に一語で表すとすればどのような語をお選びになるでしょうか。その「この理由」も含めて伺うことができれば幸いです。」という質問に、藤田校長先生は「耕」という漢字一文字を挙げ、その「理由（この「を」「耕す」は、田畑を時間をかけて丁寧に育てることである。読書教育も同じように、すぐに成果が見えるものではなく、子どもの心を耕す、言葉を耕す、思考を耕す、学校文化を耕す、地域や家庭とのつながりを耕すという積み重ねによって、少しずつ豊かな土壌をつくっていく」と答えてくださいました。

「豊かな土壌」といえば、旭丘小学校では、月に2回程度、先生方の中で講師の順番を決め、自分の得意分野で講義をするOJT「あさ力フエ（旭丘力フエ）」を実行しておられるとのことでした。「あさ力フエ」とは放課後に



左から藤田校長と筆者

「博報賞」について

「博報賞」は、児童教育現場の活性化と支援を目的として、財団設立とともにつくられました。「ことばの力を育むことで、子どもたちの成長に寄与したい」そんな思いを核に、日々教育現場で尽力されている学校・団体・教育実践者の「波及効果が期待できる革新的な活動と貢献」を顕彰しています。また、その成果の共有、地道な活動の継続と拡大の支援も行っています。

活動領域

- 国語教育●日本語教育●特別支援教育
- 日本文化・ふるさと共創教育
- 国際文化・多文化共生教育 など

「博報賞」概要

正賞：賞状
副賞：博報賞100万円 功労賞50万円 奨励賞30万円
後援：文部科学省
応募期間：毎年4～6月下旬
◆受賞者発表：10月 ◆贈呈式：11月(予定)

博報賞問合せ先:hakuhoushou@hakuodo.co.jp

公益財団法人 博報堂教育財団

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2丁目2-3 日比谷国際ビル14階 TEL(代表):03-6206-6266(平日9:30～17:30)

詳細については、
博報堂教育財団ホームページをご覧ください。

